

ジャガイモ(ジャガタライモ)

牧 幸 男

ジャガイモは、わたしたちには必須の食品で、料理、加工、醸造などに最も需要があり、特に保存がきく野菜として扱われる重要な食物である。

ジャガイモの原産地は南アメリカ大陸のアンデス山脈地方で、チチカカ湖畔が発祥とされ、標高3,000～4,000m高地で500年頃に栽培されたと考えられている。ヨーロッパ大陸に伝えられたのは、インカ帝国Inca Empire（1438～1533）の代とされている。しかし、具体的に「いつ」「誰が」伝えたのかについてははっきりとしたことは不明である。スペイン人がジャガイモを本国に持ち帰ったのは1570年頃、新大陸の「お土産」としてもたらされたものであろうと推測されている。その後、1600年頃にスペインからヨーロッパ諸国に渡来するが、この伝播方法にも諸説あり、不明とされている。

ジャガイモは、世界の温帯地方に広く栽培されているナス科の多年草である。地中に横にはう地下茎を持ち、その先端には肥大した「塊茎^{かいけい}」となる。葉は互生して長い柄がある。6月頃、上部の葉のわきから花枝を出し、白色または淡紫色の花が咲く。



ジャガイモの花

ジャガイモは世界中で栽培され、デンプンが多く蓄えられる地下茎が芋の一種として食用にされ、保存がきく野菜として最も利用されている。利用形態は、生食（青果）、加工、澱粉原料の3種類に大別される。食用の塊茎は、味にクセがなく、野菜としても、また穀類としての両面を持ち合わせている。

石坂友二の句集『光粉塵』に「馬鈴薯のは花白ければ誰も思わぬ」という作品がある。白いので馬鈴薯の花にだれも気止めないかもしれない。馬鈴薯は「バレイショ」と詠むのが最も自然だと思うが、夏目漱石の『彼岸過迄』では、振り仮名にジャガイモとある。農林水産省や農協では「馬鈴薯」一般的に「ジャガイモ」が使われているようだ。亀井勝一郎の『亀井勝一郎全集』に「馬鈴薯の花」という随筆がある。「北海道の馬鈴薯は有名だがあの花に注意する人は少ないようだ。・・・決して派手な花ではないが・・・平凡と言えば、こんな平凡な花はあるまい。しかし、よく見ると実に清楚だ。」と記述がある。「派手な花」いい場合もあるが、平凡な花も大切にしたい。

主成分がデンプンであることから、米や麦、トウモロコシと並んで、国によっては主食にもしている。ジャガイモの生産が、世界では中国、インド、ロシアが多く、我が国では北海道が全生産の80%近くを占めている。

ジャガイモが我が国に渡来したのは、16世紀後半の安土桃山時代（1568～1603?）とされている。当時、オランダ商人により、インドネシアから長崎に持ち込まれた。江戸時代以降、我が国では、米の収穫に不利な山間・寒冷地での栽培が広まった。18世紀末には、ロシア人の影響で北海道・東北地方を中心に、飢饉対策として栽培された。<https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャガイモ> 本格的に導入されたのは明治維新後で、北海道の開拓のためであった。川田龍吉男爵（1856～1951）が明治11年（1908）年イギリスの種苗商から輸入した種芋の中で、好成績を収めた品種が「男爵芋」と呼ばれるようになったとのこと。



新ジャガイモ

当初は西洋料理の素材としての需要であったが、洋食の普及とともに、徐々に肉じゃがなど、日本の家庭料理にも取り入れられるようになった。

特に飢饉対策には、寒さに強ため救荒作物としてジャガイモは貴重な食品だった。単位面積あたり収穫量が多いこと、年二回の収穫も可能なためだった。このため多くの呼び名が生まれた。その呼び名を示した。[二度芋]、「カブタイモ」、「ジャガタライモ」、「サントク」、「お助けイモ」、「善太夫芋」、「清太夫芋」、「治助イモ」など数が多い。

ジャガイモの問題点は、ジャガイモの一部に毒性があるからである。葉および塊茎は全く無害であるが、茎や果実は、毒性があるので注意が必要である。特に、毒性がある箇所は、芽とその芽の根や、緑色になった部分皮に、アルカロイドのソラニンやチャコニンが多く含まれていること承知してほしい。両者とも毒性があり、微量でも摂取すると、吐き気、おう吐、下痢、腹痛、頭痛、めまいなどの食中毒症状が発祥し、多量に摂取した場合には重症化、命に関わる危険性がある。また、通常のカサネによる分解が少ない。長野県環境保全研究所の研究員は、芽の根は完全除去が望ましいと説明している。もう一点、ジャガイモは長期保存が可能であるが、保存について特徴を承知してほしい。理由は、低温に弱い性質で、4度以下になるとデンプン質が変質することから、冷蔵庫には入れないで、紙で包んだり紙袋に入れたりして、日の当たらない風通しの良い場所で保存するのがよい。

馬鈴薯の 花咲く頃と なれりけり 君もこの花 好きたまらふ 石川啄木

馬鈴薯の 花咲き穂麦 あからみぬ あいびきのごと 岡ををのぼれば 北原白秋

馬鈴薯を 夕蟬遠く 堀りいそぐ 水原秋桜子

じゃがたら の 花に今宵も 月の量 野口白汀

植物名は、牧野富太郎博士によれば「1550年頃。スペイン人によってヨーロッパに輸入され、我が国には、1598年、オランダ船がインドネシアのジャカトラ（現在のバタビア）から持参したので、ジャガライモの名がある。漢名は陽芋または馬鈴薯を当てることがあるがこれは全く別の植物である」と述べている。馬鈴薯の植物名は、小野蘭山（1729～1810）が『臺筵小牘』（1807年）の中で命名したといわれている。一説には、ジャガイモの形が馬につける鈴（馬鈴）に似ることから、この名前になったと言う。なお、中国では他に「土豆」、**「洋芋」**、**「陽芋」**、**「薯仔」**などとも呼ばれている。別名は、地豆子、爪哇薯、**洋芋**、**南京芋**、**香芋**など多くある。

我が国では、「バレイショ」の名称は、日本育種学会、日本作物学会、日本植物防疫協会、**「ジャガイモ」**の名称は日本園芸学会、日本植物学会、日本土壌微生物学会である。しかし、我々はこの呼び名を使うか問題はない。

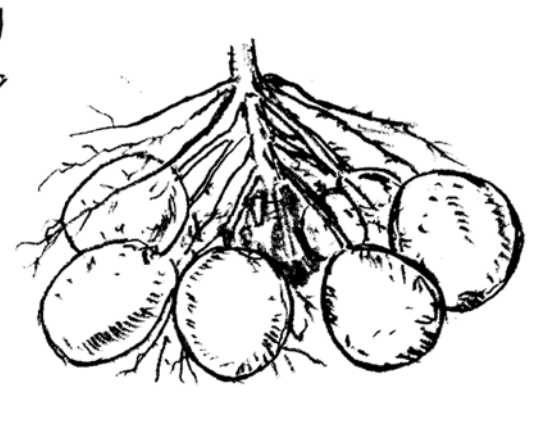
学名は、*Solanum tuberosum* で、属名は意味不明のラテン古名、一説にはこの属の植物に鎮痛作用をもつものがあるので solamen(安静)からついた名とも言われている。種小名は塊茎の意でバレイショを示している。

ジャガイモの薬用は、漢方の使用はないが、民間療法で、生のジャガイモのすりおろしを、湿疹、かぶれ、打ち身、くじき、やけどに小麦粉と酢を混ぜてガーゼなどに延ばして患部に貼付していた。

花言葉は「慈愛」「恩恵」「慈善」「情け深い」である。



地上部



地下部